



羽田悠一郎 (はつん)

フレンチブルドッグ専門「ZAIHOO (ザイホー)」代表

長年のパートナーとして「犬質」にこだわったフレンチブルドッグの子犬・若犬を紹介するフレンチブルドッグ専門店の代表。自身のドッグショーやブリーディングの経験から知り合ったフレンチブルドッグ専門のショーブリーダーと提携。自身の目で選んだ「良質な子犬」を紹介することにこだわりをもつ。



Important words

フレンチブルドッグの  
からだのこと

**フ**レンチブルドッグにハマる方の入り口は、「他犬種では味わえないユニークで個性的な姿形に魅力を感じた」という理由が多いのではないかと思います。しかしフレンチブルドッグには、そんな個性的な姿形だからこそ弊害があることをご存知でしょうか。

そもそもフレンチブルドッグという犬種は、動物病院で全身くまなく検査をすれば、何らかの異常が見つかる犬種と言っても過言ではありません。もちろん、犬種のスタンダード（犬種標準）によって定められているものがあるのですが、健全性をメインとして考えてしまうと、矛盾が多々あるのです。それだけに、フレンチブルドッグのブリーダーは健全性を考慮しつつ、よりフレンチらしく、最適な繁殖を心がけるしかありません。

ここ最近では、一般家庭で自身を飼われている子を交配して子どもを残したいと考える方や、男の子と女の子を迎えて、将来的に子どもを作りたいと考える方が増えていきます。もちろん、それ自体は悪いことではありませんし、正しい知識があれば健全な子も産まれてきます。ただ、フレンチブルドッグという犬種は、知識ある優良ブリーダーが勉強と経験を重ねて交配しても、健全でない子が産まれてしまう可能性が少なからずある犬種だということを理解しておいたほうがよいと思います。

たとえば、交配したい男の子と女の子の良い部分、悪い部分を理解せずに交配することで、悪い部分により悪くなる場合があります。そして子犬は何頭産まれるかわかりません。もしかしたら、なんの考えもなしに交配したことによって、不健全な子が5頭、6頭と産まれるかもしれないのです。それでも自分の可愛い愛犬が産んだのですから、不健全だろうと関係なく可愛いことでしょうか。ただそんなとき、その子犬の行き先がなかった場合は、ご自身で5頭、6頭を育てることになります。そういったリスクもゼロではないことは理解しておいたほうがよいと思います。2頭飼いで、3頭飼いにしたりすれば、子孫とは考えずに、新たな子犬を迎えるといった選択も考えたほうがよいのかもしれない。

それでも子孫を残したいと考えるようでしたら、まず、愛犬の女の子を購入したお店やブリーダーさんに相談されるのがよいと思います。まずはその子がブリーディングに適しているのか。適している場合、どんな男の子と交配するべきか。交配、出産、子育て、子犬の行き先のケアをどうするか、などなど。正しい知識で助言してくださる方に相談するべきだと思います。

もちろん、スタンダードに近い子が正しいとか、偉いとか、そういうことを言いたいわけではありません。ただ、インターネットで調べあげた知識で、血統や交配のかけ合わせについて詳しくなかった気になってしまう方は、特に注意してください。あなたがあなたの仕事のプロであるのと同じように、



山中健介

プロハンドラー

フレンチブルドッグに携わって15年以上。その他にロットワイラーも長年にわたりブリーディング。現在ではショーハンドラーとしてフレンチブルドッグを中心に活動しつつ、自らも6頭のフレンチブルを所有している。犬舎名は「LINDAS」。



後悔しない  
健康法



極端に言えば、不健康をブラック、健康体をホワイトと考えると、フレンチブルドッグはグレー犬種といえるのかもしれませんが。

ブリーダーはブリーディングのプロであり、生き物を扱う経験が豊富にあるのです。

交配について少し脅かすような感じになってしまいましたが、フレンチブルドッグは、それだけ「からだ」の面で簡単な犬種ではないということです。極端に言えば、不健康をブラック、健康体をホワイトと考えると、フレンチブルドッグはグレー犬種といえるのかもしれませんが。

話を戻しますが、それだけ異質な姿形ですから、飼育する上でのコツや気をつける注意点もいろいろあります。グレー犬種だからこそ、**飼育管理の差が大変出やすい**のです。飼い方次第で病気やけがに繋がるとも言えるわけです。飼い主さんは管理者ですから、愛犬の体質を理解し、弱点をカバーす

ることで、健康維持や事故を事前に防ぐよう努力しましょう。獣医さんは治療をする人であって、予防医学は管理者の仕事になります。

たとえば、フレンチブルドッグのような短吻種は暑さに弱いですが、その中でも特に弱い個体がいるわけです。喉の軟口蓋の肥大具合や、鼻腔の狭さ、興奮しやすい気質など、同じ環境や同じ温度であってもダメージを受けやすい個体があります。その辺りの体質の見極めは、管理者である飼い主さんの日頃のケアと機転にかかっています。

フレンチブルドッグで最も多く見聞きする疾病は、**関節疾患、脊椎の異形成並びに椎間板ヘルニア**です。脚に関しては、**膝蓋骨脱臼（パテラ）、股関節形成不全**。この2つの病気は共に関節疾患ですが、日頃の予防方法や緩和策が若干異なります。もし動物病院でパテラと診断され、歩行時に後肢を浮かしたり、スキップするようでしたら、これ以上悪化させないためにも適切な管理が必要です。まず、**肥満にさせず、犬同士の遊びを極力避けてください**。犬同士の遊びの際は「**踏ん張る力**」を使います。その**負荷が最も膝蓋骨に良くない**のです。また、膝蓋骨は筋肉でカバーできにくいので、筋肉を鍛えようと過度な運動をしても意味はなく、逆効果となります。パテラの子は極力低負荷で短時間の自由運動と肥満に気をつけることで、症状を軽くすることが可能になります。股関節の形成に問題のある子は、管理によって、生涯関節炎を起こさず暮らすことが可能になります。よほど重度の形成不全でない限り、フレンチクラスの体重でしたら、まず手術は考えなくてよいと思います。股関節の場合は、**運動による大腿部と腰回りの筋力アップ**が症状軽減に効果的です。

具体的な引き運動（散歩）に適しているのは、**トロット歩様でのリズムカルな散歩**です。トロット歩様の動かし方は、左後足と右前足↓右後足と左前足というように、斜め向かいの足同士2本がペアとなって一緒に動きます。ドッグショーなどでハンドラーが引いて歩いて見せているのがこの歩き方です。急がず、トロット歩様が乱れない範囲でリズムよく、散歩目的地を目指してみてください。時間にしたら、10〜15分もやれば十分でしょう。あまり長時間の運動は、筋肉まで痩せさせ関節への負担も考えられますので、十分注意してください。もちろん運動量には個体差もありますので、オーバーワークにならないように、**自由運動と引き運動をバランスよく組み合わせ**てみてください。

次に、腰椎、頸椎のヘルニアについてですが、ヘルニアはある日突然発症するのでびっくりされる

と思います。腰椎ヘルニアは主に下半身の麻痺から始まり、症状は徐々に重くなり、最終的には神経の回復ができなくなるため、生涯麻痺が残ります。速やかに治療に入ること十分回復する可能性があります。ですから、できるだけ早く受診してください。頸椎ヘルニアの場合は、麻痺よりも痛みから始まりますので、愛犬が動かたがらなったり、同じ姿勢ばかりをとりまわります。頸椎ヘルニアの特徴的な姿勢としては、うつ伏せのリラックスした状態で、ナックリングと言われる、前足の足首の部分から爪先が内側に巻き込む様子が見られます。もしいつもと違う異変に気がきましたら、早急に受診してください。目を増すごとに痛みが強くなり、場合によってはショック死する可能性があります。ヘルニアの起きた部位によっては、呼吸をつかさどる神経と関わっていますから、呼吸困難に陥ることもあります。いずれにしても、発症してしまったら獣医さんに任せるしかありませんので、早めの受診をお願いします。

予防法として、完全に防ぐことは不可能でも、日常生活の中で気をつけることや心がけることを知っておくだけかなり違います。まず、フレンチブルドッグはアクロバティックな動きをさせる犬種ではないということを理解してください。たとえば、アジリティーや高い段差を飛び降りたりするような動きは大変なリスクになると考えてください。お家の中の環境では、足場のグリップが悪く滑りやすい場所で生活させることはやめてください。毎日の生活の中で足場が滑る環境に慣れてしまうこともありますが、それは常に、足首、膝関節、肩や腰、背骨へ負担がかかり、少しずつ歪みが出てきたりヘルニアにつながりやすくなります。床がすべる環境でボール遊びなどの急激なダッシュ、プリーキをかけることや、犬同士でのじゃれあいなどもすべて関節のゆがみやケガにつながりますので、足場はグリップがしっかり効く環境にしてあげてください。

それから「からだ」のお手入れについてですが、グルーミングでは愛犬とのスキンシップがしっかりとれているのが大切です。爪切り、耳掃除、歯磨き、シャンプー、ブラッシングなど、すべてを自由に触らせてくれる子になるくらいスキンシップができていたらベストですが、そう上手くはいきませんよね。爪切りだけは嫌がる、シャンプーだけは逃げ回る、など苦労することも多々あると思います。もちろん、時間をかけて信頼関係を作っていけばクリアできることも多いですが、無理にやっても逆効果だけです。ですから上手くいかない間は、動物病院やトリミングサロンを使ってあげばよいと思います。グルーミングの中でも、ブラッシングは嫌がる子も少ないと思いますし、大切なケアなので、飼い主さんがマメにやっていただければと思います。

ブラッシングは換毛期ですとラバーブラシ、アンダーコートコムなどを用いますが、普段はタオルで拭いた後に獣毛ブラシで毛の流れに沿ってブラッシングしてあげてください。スリッカーブラシ（細かいピンが並んでいるブラシ）は使用しないでください。皮膚に細かい傷がつき、毛穴からばい菌が入りますと毛膿炎や膿皮症になることもあります。ポイントは、必ずコートを湿らせた状態でブラッシングすること。スプレータイプのコンディショナー、もしくは水でも構いません。乾いた状態で行うと、滑りが悪いため毛切れや皮膚が摩擦で傷つきます。また、湿っていたほうが無駄毛がまとまりやすく、処理がしやすいと思います。無駄毛が多くなると毛色が退色し、くすんだ色になってしまいますので、短毛種のブラッシングは大切です。

フレンチブルドッグの「からだ」についてお話してきましたが、フレンチブルドッグはグレー犬種だからこそ、「飼育管理の差で病気やけがに繋がる」ということを常に頭に入れておきましょう。弱点と回避法を知ることにより、過剰な不安を持つことなく、楽しいフレンチライフを送っていただけるように頑張ってください。

**B**

アジリティーや高い段差を  
飛び降りたりするような動きは  
大変なリスクになると  
考えてください。